

特207 /

270

八  
輯 叢書

參 禪  
同中異辨の眼

原田祖岳著

東京

正信  
同愛會發行

始



特207  
270



原田祖岳著

參禪

同中異辨の眼

東京 信正 同愛會發行



參 同中異辨の眼目次

第一章 序論	一	第五節 坐禪の所得	一六
第一節 禪と誤解	一	一、胎内教育の必要	一八
第二節 四種の禪根と應病與藥	二	二、休息と活動	二〇
第二章 下根初期の禪	五	三、睡眠時間を割け	二〇
第一節 坐禪の意義	五	第六節 時間の問題	二二
第二節 諸道の本源	九	一、極端な場合	二二
第三節 修養不必用論者に告ぐ	一一	二、穩健なる解釋	二三
第四節 坐禪の方法	一四	三、天與の時間	二三
一、坐禪の形式	一四	第三章 下根禪と中根禪との比較	二五
二、深呼吸の方法	一五	第一節 序論	二五
三、數息觀の方法	一五	第二節 有漏法と無漏法	二六

第三節 相對界と超相對界との比較	二六	第四節 二つの實例	二二
第四節 有限的と超無限的との比較	二六	第五節 方法を選ばず	二七
第五節 生死界と超佛性界との比較	二九	第六章 上々根の禪	二九
第六節 結論	三〇	第一節 前後を比較して	二九
第四章 中根禪	三三	後者の大旨を明す	三〇
第一節 中根と上根とを分つ所以	三三	第二節 王三昧	三三
第二節 中根誘引の手段	三四	第三節 應用無碍自在	三五
第三節 法は元無法	三五	第四節 誤解を誠しむ	三八
第四節 看話默照の長所と短所	三六	第五節 向上人の修行振り	三九
第五節 結論	三七	第七章 結論	四二
第五章 上根禪	三九	第一節 機類千差なれば	四二
第一節 中根と上根との區別	三九	手段も萬差なり	四三
第二節 看話默照一致に歸す	四〇	第二節 學人の四種と禪の唯一法	四三
第三節 看話默照と悟道の遲速	四一	第三節 本書解説の理由	四三
		第四節 一括して正修行をすすむ	四三
		第五節 見道は佛祖の面目なり	四三

看話禪  
公案は古  
話公案を古  
則ひ、此を  
云古則夫  
案を工夫  
參究する  
のを見よ  
とて、悟  
看話によ  
つて、頓  
を得んと  
して坐禪

# 參 同中異辨の眼 禪

## 第一章 序 論

### 第一節 禪と誤解

坐禪は古來より禪門唯一の修養法であつて、苟も實際に佛法血滴々の修行をなさんと志すものは是非とも坐禪を行じ接心をせなければならぬのである。坐禪を行じ接心をするには即ち上は佛恩の報謝となり、中は衆生の教化となり下は自己の修養の大本となり且つ人格完成の最捷徑となるものである。

つらく考ふるに世間人の禪に就いての考へを見るに、どうも一を知つて二を知らないものの様である。彼の黙照禪、看話禪等も其の弊を云へばどちらにもあるが、弊さへ除けば共に是れ一貫せる佛祖の醍醐味たることを御存知ない様子だ。甚だしきに

話するを看  
は支那の宋  
朝に於ては  
曹洞宗の争  
の勢力を争  
つた時に當  
宗宏智正  
覺の門下  
か宗大臨  
宗門大臨  
を罵詈訾  
を罵詈訾  
たるに用ひ  
慧門又大  
門下又大  
照禪とを  
後世に傳  
つては此  
つては此  
曹洞宗の  
微洞の臨  
語を特  
たすとす

至つては凡夫禪や外道禪を以て佛祖正傳の禪と一如一等なるかのやうに誤解しながら、口に筆に得意さうに亂道して居る連中が澤山ある様だが、誠に遺憾千萬な事である。だから禪に心掛けるものは最初に禪の何たるかを大觀しないと、彼れか是れかと氣迷ひをする。

近頃は結構な事には、新聞雑誌や多くの印刷物等の文明の機關によつて、居ながらにして夫等の人の説を聞く事が出来るが、其れが却つて氣迷ひの本となつてどうして好いのか見分けが付かなくなり、折角の慕道の志も、爲に挫折するもののあるのを屢々見受ける。實に氣の毒な事である。故に先づ初めに禪要の大觀を述べ、參禪者の心得て置くべき事を順を追ふて話して見ようと思ふ。

## 第二節 四種の禪根と應病與藥

爰に先づ上中下根等の順序次第を設け、初期の者の心得から順次上々根の禪に及び、

最後に總括して、大觀すれば畢竟一如の禪なる事を明し、以て參禪者は只正師の會下に參じ、其の師の指示を眞受けに受け込んで坐りさへすれば其れで好いのだといふことを示さうと思ふのである。

元より禪そのものには、上中下等の階級のあらう筈はないが、只人に上根と下根との差別があるのである。例へば此處に五人十人並べて之を横に見ても各々機根が別であることが分ると共に之を縦にして一人に就いて時間的に見ても上中下の別を見る事が出来るもので、則ち其修行の最初は下根の機であつても、修行力の進むにつれて、次第に上根の人となるが如きものである。

さて既に根機に上下があるとすれば、説法も亦對機の方法であるから、分相應の方法を以て導かねばならない。然るに近來は兎角正師に就て坐つて見た覺えも更になくて、何だか禪々と云ふ影法師を捉へて、甲論乙駁彼れを是とし、此れを非とし勝手の熱の吹き放題をやるものがある。イヤ／＼少々坐つて見て、悟りの眞似でもしたも

に此の弊害が殊に甚だしいには困つたものだ。

さて人間は十人十色で機根は千種萬般であるから黙照の餅好きもあれば、看話の酒好きもあり、又大人には大人相應、子供には子供相應、非常に熱心な人、一寸のぞきの人もあるのであるから其れ相應の手段が是非なければならぬ。千篇一律の活版摺的の死んだ手段では何の用にも足らぬのである。

## 第二章 下根初期の禪

### 第一節 坐禪の意義

下根と云へば悪く聞えるか知らんが、左様ではない。一切の禪人の皆最初に履むべき道である。佛の最初の説法（華嚴經を説かれたのは別に深意がある）はこの下根の禪であつた。一口に云へば、五戒十善を説き、善惡因果の理を示し、以て清淨なる心身に至らしめんがために、人間當分の禪を説いて、先づ人たるの道を完うせよと教へ給ふたのである。これを人天教の禪、有漏法中の禪といふ。今日の言葉で云へば世間的の禪である。

元來禪とは絶待の一心、即ち自己の本來の主人公を指すのであるが、今は下根初期を相手として言ふのであるから先づ禪とは靜慮又は棄惡と翻譯して、慮を靜かにするとも讀み、靜かなる慮りとも讀むのである。

既に靜慮に至れば妄想の激浪漸く靜かになり、自然と罪惡に遠ざかることが出来るから棄惡とも言ふのである。

要するに人天教的の主眼とする所は、罪惡を離れ、正善に進み、苦業を離れ、安樂の道に進ましめんとするにあるのである。

抑も最初に坐禪でもしたいと云ふ人は自分は煩悶が多いからとか、社會は不愉快であるとか、人生は苦痛の谷底であるとか云うて居る人々で、どうにかして靜慮によつてこの苦しみを免れたいと云ふ希望の下に坐るまでのことで、勿論善惡因果の道理などは信ぜられない人であるから、此の人は初心中の初心者で、まだ人天教中の機根とも云はれぬほどであるが、ともかく志を厚くして熱心に一二ヶ月も坐る内に精神も追々治まり、氣分も次第に壯快になつて行くに隨つて、繼續して打定するほどに、いつしか善惡因果の道理も信ぜらるゝ様になり、人生向上の趣味も深くなり、洋々蕩々として定を樂しみ、善を勵む人となつて来る。茲に至つて始めて人天教の機熟せりと云ふべし

である。

猶禪と云ふたからとて別の道ではない。禪は結局人々本來の性徳を發揮するの絶好の道であると云ふだけのことである。従つて世間一切の教法も皆悉く禪の一手段であるのである。然し世間に行はれて居るあらゆる教法は人々本具の性徳まる出しの教ではない。皆何等かの着色がある。

さてこの着色せる色眼鏡を透して本來の性徳を眺めるのであるから性徳を眺め得ない先に先づ色が着いて了ふ。十中の八九迄は皆この色彩に迷ふてもふから本來の性徳を發揮しない了るものである。して見ると煩惱の上塗をして迷ひに更に迷ひを重ねた事になつてしまう。その位ならばいつそ初から其の様な道にはいらぬ方が好いのである。故に古人も

染めてくやしや江戸紫に

元の白地がましぢやもの

と云うて居る。

次に又一つの缺點がある。それはたとへ他の總ての教は性徳發揮にありとしても、其の着色のために、本性の都に向つて眞向に突進することが比較的容易でないから、よしんば其の着色に滯らぬとしても、事實性徳を發揮し得る人が古へも今も誠に少ないのである。此の邊の消息は永平道元禪師の「辨道話」や白隱老漢の「遠羅天釜」などを見ると思ひ半に過ぐるであらう。

然しながら種々の着色がないと、御馳走も御馳走に見えない人々の爲には種々の色彩を施して箸を取らしめるので、禪も矢張機根相應の着色をして、御馳走をするのであるが、決して其の着色に迷ふて都入りを忘れる弊のないのが禪の特色である。世間の教へはどうも左様はゆかぬ。皆着色本位になつて本來の家郷を忘れて了うて居るのが情ない。

禪の特色は方便に迷はない所にある

### 第二節 諸道の本源

諸道の本源は總べて禪である。眞言、華嚴、天台等の實大乘教から、起信論、唯識論等より小乗有部の教へに至るまで、教相の研究は目的に非ずして總べて手段である。其の目的は觀法（坐禪）にあるのであるが、今日では其の大切なる觀法（坐禪）を實行して居るのを見な事がない。皆屁理窟に墮して居る。

彼の一向專念彌陀名號も、一天四海皆歸妙法の稱題も、すべて機法一體に體達するの手段であるから是れ即ち禪である。但し其の宗旨々々によつて、説明の方法は夫々違つてゐるが其の内容は一體一如である。であるから其の着色に迷ふて之に執着して居るものは何と言ふか知らぬが、そんな着色話に狼狽して本來の目的を忘れてはならぬ。又神道に於ても、其の極處はシヅココロを得るのが目的である。儒教の五倫五常の教も靜坐によつて始めて眞實の實行が出来るのである。王陽明の如きは正に其の意を明にしたものである。老莊の虛無と云ふも、畢竟靜坐所得の心境に名けたものだ。又印

神道 儒教 老莊



九十六種の外道

東洋思想の特長

キリスト教

世間一般の静坐法

諸道の奥義と禪

度古代の九十六種の宗教哲學も四禪八定などの有漏定でこそあれ皆坐禪觀法をして居るのである。斯くの如く幽遠なる東洋思想はすべて一種の冥想、即ち靜坐觀法によつてその實際の心境を體現し發揮したものである。のみならず西洋のキリスト教でもある一派は一種の靜坐を實行して冥想に耽ることをしてゐる。お祈り等も亦これに外ならない。

更に又一時流行した岡田式、二木式、藤田式、平井式等の呼吸法靜坐法等もつまりは世間禪の一種である。又或る心理學者は催眠状態の無念無想と、坐禪の無念無想とは一致であると云ふて居るが、其の坐禪とは世間禪の坐禪なりと解すれば、似通ふて居ると云ふても好い。

況んや、何事も其の妙處に至つては、茶の湯、生花、俳句、詩歌等の柔しい事から劍道柔道等の荒々しい業に至るまで、其の奥義に至つては禪と一致する。苟も精神修養と名けらるゝものから文藝技藝等に至るまで、種々様々に色合は付い

て居るが、その本源、その内容は要するに皆悉く唯一の禪海に歸入して一滴も漏さぬ境地に到り着くことに外ならぬ。但し其の内容は正邪深淺霄壤も啻ならぬもののあることは必ず忘れてはならぬ。

若し禪を離れて人道を説き倫理を講じ哲學を論じ宗教を説くと雖も、それだけでは畢竟疊の上の水練で何の價値もない。今日の倫理學者等が必ずしも人格高き人に非ずなどと云はるる矛盾は此邊で解釋がつくと思ふ。所が其の根本問題を忘れて、唯々枝葉末節の教理や理窟や文字文章學說等の色彩に迷ふて、却つて手脚の存在を忘れて教壇に立つて人を教へて居る様な耻知らずが到る處にはびこつてゐるのは困つたものである。

第三節 修養不必用論者に告ぐ

中にはこう言ふ人がある。成程禪は修養の根莖枝葉一貫した最も適切なる道であら

倫理學者必ずしも人格者に非ず

うが、自分は坐禪などといふ面倒な辛いことを爲なくとも、世に處して立派に何でもやつてのける事が出来る、などと空感張りする向もある。これは仲々よく聞く言葉であるが、其れはあまりに欲のない人だと見下げざるを得ない。何となれば斯く大言壯語する人が、果して百折千撓、屈せず屁古垂れず、順境にも逆境にも撓まず、威風堂々泰山の如く、洋々蕩々、水の流れる如く萬事を處して行けるかどうか頗る怪いしものである。否そんな大言壯語するものに限つて實は大の憶病者で慌てもので怒りつぼくて尻の穴の小さい小人物であるからである。

それはそれとしてともかく立派にやれると思ふ人に向つて一言申上げる。成功も無限、修養も無限であるから、其の立派にやれる人にして禪を修すれば猶々立派にやれるではないか。

全體禪とは何にか特別の仕事の様に思ふからいかん。なにも特別の事ではない。要するに吾人の先天的に具有して居る絶對圓滿なる本徳を發揮するの修養であるのだから

禪は特別の事に非ず

ら、最早是れで澤山だと云ふべき時はない筈だ。例へば學問すると同様で自分は既に一通り勉強したから立派に世渡りするに差支ない。もう勉強するの必要なしとは言へますまい。(金を作る事も藝術を學ぶことも技術を修める事も皆同じ事である) 勉強も無限なるが如く、本徳發揮の修養も無窮無限である。然るに自分は立派にやれるからこれ以上の修養は要らぬ、もふ澤山であるとは誠に情ない、さもしい考ではあるまいか。

而もかゝる無意味なる考は相當の地位あり、教育あり、識見ある人々に却つて多いと云ふことだから實に困つたものだ。方今は小才子小人物小懶惰者は中々輩出するけれども、追々偉大なる人物の蹶起せざるやうになつたのも故あるかなと思ふ。古今の英傑大人物を見れば、何れも相當に精神の修養を實際にしてゐるのである。

請ふ、試みにせめて兩三ヶ月間でも好いから親しく禪鼎に箸を染めて見るが好い、必ず趣味津々として捨て難いものがあるであらう。

古今の偉大な人物は皆精神修養に志した

#### 第四節 坐禪の方法

さてこれから下根坐禪の方法を一應お話しする。この修行は學問の有無に拘らず、老幼男女の差別なく、智愚賢不肖を問はず、志さへあれば誰にも實行の出来るものである。決してむづかしいものではない。

##### 一、坐禪の形式

形式は「普觀坐禪儀」に書いてある通り、結跏趺坐と半跏趺坐であるが、坐禪の時ばかりが坐禪ではない。坐つてゐる時でも、道中しながらでも乃至電車の中でも椅子の上でも或は病氣中なれば床の上に寝て居ても出来る仕事だ、だが、一番好いのは正身端坐である。尙婦人は其の都合で所謂日本坐でも悪くない。無論男子でも不慣の間はそれでやるのがよろしい。併し其の姿勢だけは必ず正しくなくてはいけないのである。

##### 二、深呼吸の方法

次に深呼吸である。先づ坐して心の落付くまで、五分間でも十分間でも、下腹部即ち氣海丹田にいくばくか力を入れ（入れ過ぎては絶対にいかん）其の坐蒲上に心をピタリと置いて、而も一點の餘念も混へず、又混へまいとも思はず、自然に深くゆる／＼吸いこみ、且つ其の儘にして、苦しくなつたら急に呼きだすのであるが、其の人の體力の強弱の程度に應じてなすのである。若し其の程度に過ぐれば非常な害がある。其の害とは頭痛を覺えたり、肩が凝つたり、齒が痛んだり、上氣たり、腸を痛めたり、下痢を起したり、秘結したりすることがある。

##### 三、數息觀の方法

次に先づ數息觀をやるのが一番よい。（種々手段はあるが）蒲團上の心そのままに呼吸の出入りに全く心を專注し且つ出入を一息として、一つ二つと一心に數へ、斯くて

十に至つて又一より數へるのである。斯くて二十分間も實行すれば、浮いた心も必ず落付き騒ぐ精神も必ず靜まるものである。

さて一心が布團上、丹田裡に能く落付いて自ら丹田一杯の精となり、やがて通身一圓の心となり、追つて自他法界一枚の境に入るとも、數息觀が邪魔になる、その時に至れば數息を中止してよい。だが唯ポツとして居ては斷じていかぬ。眼も心もハツキリとして凜然と緊張して坐らねばならぬ。是の如くして坐れば好いのである。

かく筆で書き並べると中々面倒なやうであるが、實行して見れば何んでもないことである。然し愈々實行に移るときには正師に就て能く聞かなければならぬ。自分勝手にやるとどうしてもうまく行かぬ。而して此の世間禪は即ち有漏定であるから、恰も飯を喫すると同様で、怠らず修すれば限りなく増進するけれども、若し捨てて顧みなければたとへど程進んで居ても追々退轉してしまふ。

### 第五節 坐禪の所得

すべて實行するに就くべし

解脱以外に坐禪の利益などを説くのは本意ではないが、釋尊ですら凡夫二乗の小根機のためには、先づ其の結果の利益を説いて居らるのであるから、衲も聊か禪の御利益を話して見よう。

坐禪をすれば第一身體がますます健全になる。精神はいよ／＼圓滿になるから智情意が完全に發達するので不愉快に感じた人生が愉快に、不徹底の事理が追々明晰に、怠惰の性は一變して勤勉となり、イヤ／＼ながら働いて居た職務も限りなき趣味を覺え、天を楽しみ道を歡び、膽を廣大(物にこだはらぬ)にし、心を微小(細心に事を處理す)にする。又此の道を進み行けば、其の立場々々に安心すると共に無限の希望に向つて進むことが出来る。一人是を行へば其の身能く治り、家庭是を行へば家庭は必ず平和に、一村是を用ゆれば一村健全に發達し、一國是を行へば富國強兵は云はずもがな、監獄警察裁判所も結局は要らぬこととならう。世界是れに隨へば陸軍も海軍も無用の長物となる底のものだ。

要旨の必

願はくは學校、會社、郵便局さては工場等に至るまで是非實行してもらひたいものである。既に二三の學校では之を實行して著しい効果を擧げて居る。事實は第一の雄辯だ。試みに實行して見るべきである。若し熱心なれば一二週間、普通なれば一二ヶ月或は一二年修めば其人は必ず以前の自分とは全然別人であるかの如く感ぜられるほど向上變化して心から踊躍歡喜を禁じ得ないやうになるであらう。

殊に心してもらひたいのは教育の事であるが、教育と云へば直に智育あることを知つて人格の向上を計ることを忘れてゐるものが大多數であるが、實に大いなる誤りである。人格の劣なものに智慧を持たせるのは、子供に正宗の名刀を持たせるよりも猶危険な事だ。今日では所謂の教育は愈々盛んになるが、其の盛なるに反比例して社會が墮落するのも理ありと云ふべきである。

### 一、胎内教育の必要

さて一般的知識を植ゑるには小學よりも中學、中學よりも大學の方が益々効果的で

あるが、人を感化するには其の反對で、大學よりも中學、中學よりも小學、小學よりも家庭に於ける六七歳迄にある。其の六七歳よりも實に母の胎内教育にあるのである。

胎教の人格教育に及ぼす感化力の偉大なることは識者の夙に知る所であるが、是が仲々容易でないので、誰もとかく疏かにして居るやうであるが、昔も今も此に心ある母親は、耳に惡聲を聞かず、目に惡色を見ず、心に惡意を懷かず、進んで善を見、善を聞き、善を思へと言はれ、またそれを實行したものであるが、更に進んで或る一定の時間だけでも好いから、其の母たるものは一日何時間かづ、誠實に坐禪したら身心共に健全圓滿、有爲活潑の眞に理想的な愛兒を得ることが出来ようと確信して居る。

衲は此事を深く信じて心あるものに極力勸めてゐる。其の實行した人の結果をさいて見ても、たしかに著しい効果のあることが報告されてゐる。少くとも全然胎教を實行しない子供とは肉體的にも精神的にも大いなる相違がある。胎教をした子供は出産直後より人間の貫目（品格）が違ふ。身體も丈夫である。

## 二、休息と活動

近頃の人は何かと言ふと直に云ふ、そんな餘計な時間がないとか、生存競争の激烈なる現代に處しては、働いてもく猶且つ競争場裡の敗伍者となるのに毎日一定の時間を定め、其の間黙々として端坐するなんて云ふ暢氣なことは到底出来ない相談である。とこの言一應の道理は無いでもないが然らば問はん、諸君はそれ程までに多忙なるにも拘らず、何故に夜寝るか。言ふ迄もなく、夜睡眠するのは晝活動せんが爲に休息するのである。其の休息を廢すれば活動も出来ないのみならず、第一生命を持つことも不可能となるであらう。坐禪も亦然り。明日の大活動に備へんため、將來否日々活動の源動力を養ふ爲の心身の休養であり修練であるのである。

## 三、睡眠時間を割け

坐禪をするのは眞善美の正道を愉快に履んで人生に意義あり趣味ある發展向上をな

さんとする活動の源泉を養はんが爲に、心膽を鍛錬するのであるから、世の中が忙しくなればなるほど、禪が必要となるのである。而して睡眠時間は誰でも所有して居るのであるから、其の睡眠時間を僅か一時間だけ割いて坐禪したら如何である。それも出来ぬと云ふ人は云ふであらう。其れでは睡眠不足となる、睡眠不足は身心に大害ありと併し決して左様でない、坐禪せずに五時間寝るよりも、坐禪して四時間寝た方が遙か疲れが能くなほる。論より證據、試みに寝る前に一時間坐禪して寝て見なさへ。實際寝る時間は一時間だけ不足するも、朝目の醒め鹽梅は一時間も多く寝た程心地よく眼が醒めることを保證する。若し果して然りとすれば、睡眠時間を事實よりは一時間大削減して居つても、其の効果より見れば一時間だけ睡眠時間を延長して居るのであるから、常の睡眠時間の外の時間を作り得た道理になるではないか。

## 第六節 時間の問題

## 一、極端な場合

次に働く方の時間の側より云へば、例へば一日八時間の勞力によつて日給八十錢の賃銀を得るものと假定する。さて坐禪する時間を一時間として七時間だけ勞働すれば七十錢の収入となるから、毎日十錢づゝの損失をせざるを得ない次第になるから困ると。之も一應はもつともであるが、決してさうではない理由を述べて見よう。

之を極端に言ふと假令一時間坐禪をするために、十錢位損失をしてもよいではないか。毎日僅々十錢づゝの損失はしても坐禪によつて得るところの効果は萬金にも換へられぬ徳を得るのであるから、古來この爲には財産を棄て、地位も抛ち身命をも抛り出して修行した人も澤山あつたが、而しそれは餘りに極端である、無意義である、禪は斯程迄して求むべき程の價值ある道でないといふと非難した哲人は唯の一人もない。寧ろ却つて之を稱揚して尊い人物だと云はれてゐるのである。

## 二、穩健なる解釋

併し右は特別の熱心家の事で、今は下根初期の者の爲に穩健に言ふならば、八時間の

勞力を日常の業務に盡して不愉快な日送りをするよりも、一時間坐禪して七時間愉快に働いた方が物質的の效果に於ても、損どころか却つて多くの仕事ができ能率の擧がるのは確かである。殊に精神上の勞力を費す職務の人は必ず一層の得る所があると確信して更に疑ふ餘地はないのである。衲は曾て學生時代に、何時も教場へ出る前は五分間以上坐禪して、而して後に出席したものである。すると何を聞いても非常に了解し易かつたことを記憶してゐる。されば八時間の内、一時間割いて坐禪しても事實は八時間以上働いた程の實際の效果あるものである。して見れば効果の方面より云ふならば一時間を割くどころではない、却つて一時間を延長し得たことになる。

## 三、天與の時間

されば萬物の靈長である人類には、既に一晝夜に二三時間は坐禪する時間を自然が與へて居るのであると云ふてもよいのである。天の與ふる所之を取らざれば災却て其

の身に及ぶの道理であるから、此の天與の坐禪を爲すものは、精神的にも物質的にも社會の優勝者となるのは必然の道理であるが、然らざるものは共に劣敗者となるの止むを得ざるに至るのである。こう云ふといやさうではない。坐禪なんかしなくとも立派に成功した者はなくさんあるといふかも知れない。所がよく／＼考へよく／＼調べて見ると、世に所謂成功者といふものも何處か必ず偏頗な不具的な所のあるもので殊に精神的には多くの缺陷を有してゐる。見給へ、昨今所謂豪い人程悪い事をして居るではないか。大體精神的修養なしに世に大成したものが後世までその人格と業績を追慕されるやうな人は先づないと言ふてもよろしい。

終りに臨んで一言すべきことがある。それは坐禪をなすと雖も、時々正師に逢ひ薫陶を受けるが宜しい。此の聞く事と坐ることと並行せねば、或は横道に入る懼れがある。たとへ横道にそれなくとも修養の進行が遅々として捗どらない。であるから聞くと坐るとは鳥の兩翼の如きものであるから是非さうせねばならない。

### 第三章 下根禪と中根禪との比較

#### 第一節 序 論

中根の禪を説くに當つて、先づ前に述べた下根禪との比較をして置かねばならない。前者は既に話した通り、佛教から見れば人天教當分の禪であるが、古往今來を通じて世間に行はれて居る總ての靜坐や禪觀等をも之に容れるのであるから、衲ば之を命名して世間禪と云ふのである。さて此の世間禪も佛祖向上の上中下根禪に入るの階梯なりと、達觀することを得れば、世間禪即ち佛祖向上の出世間禪であるが、其の當分と云ふことを知らずして其の道以上に道なしと論斷し、誤認識するに至つては是れ邪禪なり、未了の靜坐なりとして、其の妄を開かざるを得ないのである。依つて其の當分と云ふことを知らざる者の爲に左に聊か種々の言葉を用ひて、前者後者を比較をすることにしよう。



## 第二節 有漏法と無漏法

さて前者は有漏法中の禪であるから、修するにつれて追々智情意も圓滿に、眞善美の觀も圓熟し、次第に浩浩然たる氣魄を増進することが出来るけれども、其の靜坐の實行を怠る時は、追々其の妙境界を退轉してしまふのである。所が後者（後者とは中根のみならず上根にも上々根にも通ず）は有漏法を超越した道であつて、元來これは吾人に完備せる法身の自覺に還る事であるから、一度體得したら永久に忘失することのないものである。

## 第三節 相對界と超相對界との比較

前者は相對的見地の上にある禪であるから、主觀の外に客觀を認め、煩惱の外に菩提を憧憬し、自身の外に神佛を夢想して、取捨の念憎愛の執止む時なく、常に一切を

相對的に對立的に二元的に見て遂に廓落たる天地に出づるときは決して出來ないのである。是に反して後者は超絶待の道であるから、一切の諸法は皆自己の一心の中の所現であつて決して物を二つに見ない。煩惱即菩提、生死即涅槃なりと諦信して、神佛も決して外より來らず、吾人元來不迷不悟の佛境界であるから、修する所即今其の諦信を圓成するのである。其の消息を洩らせる狂歌に

三界をまろめてぐつと呑む時は

須彌も鐵圍も咽喉にかゝらず

とある。されば海も山も地獄も天國も煩惱も菩提も天神も昆廬遮那佛も、皆是れ我が氣海丹田裡の一波兩波に過ぎるのである。併しながらこれは太平洋の水を一口に呑み干してからでなければ話せない。さもなくてこんな事を言ふと大法螺吹の出たらめになる。

#### 第四節 有限的と超無限的との比較

前者は有限的境界の禪であるから、何時まで進んでも不足の念の絶ゆるときはない。前途茫洋の歎は行けども行けども同じことである。所が後者は有限無限を超越した道であり、得不得の境を超越して居るから、初めから足不足の念の動くことはない。元來佛祖の禪は薰練觀習と云ふて、小石でも追々と積み上げてゆく様な事ではなくて、先天的に成就して居る萬徳を直下に履行すると共に承當する事を得せしむるものである。

所が此の邊の様子を知らざる或る賣紙賣禪の學者が其の著書の一節に、佛祖の禪に消極的と積極的との二つがあるなどといふ妄言を弄してゐるものがある。

凡そ祖門下の禪には消極的方面だとか積極的方面などと云ふが如きケチな事は決してない。兩極などを論ずるのは皆凡夫禪の淺薄極まる出鱈目である。尠くとも二乘以下の禪である。禪門下には一極すら説かないのである。

たとへ禪書を山程見た所で、禪鼎に一指だも染めたことのないものが、禪の真相がわかつてたまるものか。禪は學問の力を、智見の程度でわかるものではない。正信の禪客のみあつて始めて點頭し得るのである。

#### 第五節 生死界と超佛性界との比較

前者は生死界中の禪であるから、何程進んでも我執の根元を切斷することが出來ないから種々の邪見も起るし、所得の臭味を脱することも出來ない。何となく純清絶點になつたやうでも本が切れないから時々ムク〜と念起念滅し、心波海中の波浪止むとさがないから、自分以下の境界の人から見れば妄念の心念は絶對に休止して居るかの如く見えても實はさうではない。絶えず細念が噴起し、貪瞋痴慢疑等の妄波が頻に起り、自他を沈溺せしめるのである。

されば生死海當分の禪なることを知らず、今日も尙世間禪に執着して鬼の首でも取

つた氣持で上せてゐる人々は大いに反省して、早く佛性界の禪に入らねばならぬのである。後者の禪は初心より超然として宇宙即一の大法王位に安住するのであるから、我も彼も正も邪も蟬脱して無我法にも住せず正智見にも着せず、任運蕩々として無作の妙用を體現するのである。

### 第六節 結 論

前者は到底二元的立場を脱することは不可能であるが、後者は實に一元的などと云ふケチな所をも超越して居る。

前者は要するに迷界の禪であつて徹底根抵のない一種途中の禪であつて意識界中の妄想禪である。而して長所もあると同時に短所もあるから、此の邊に止まつていゝ氣持で居ると結局骨折損のくたびれ儲けに了る。

後者は迷悟を超越した眞悟界の大道であるから迷を論ずるも迷相を認めず、悟を體

得するも悟相を離れるのである。之を強いて名づけて一元とも一道とも眞實の法門とも云ふのである。

實に吾人は本來不迷不悟の本分人である。故に佛祖は其の本分人なることを知らしめて狂奔を止めしめんとして横説縦説するわけである。故に古人は「無禪の長者子なり」と云ひ、「吹毛畫裡靈光寒」と云ひ「出水未出水共に一根の蓮なり」などと説いて人々個々圓成の佛性を見得せしめんとするのである。此の本具の靈徳あることを信ずることを得るに至つて始めて中根の機となることを得たりとなすのである。

比較談は此の位にして、此に一言して置くべき大切なことがある。現今は至る處に僧堂もあり、禪學會もあつて實參實究骨折つて修行して居る高士も幾百千人かあらうが、其の多くは前者の修行者であつて、後者の中に入るべき禪客は實に稀であると思ふ。大宗匠に參じて居れば皆後者であると速斷してはならぬ。試みに、予は何の爲に修行して居るかと三省して見るべし。思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

亦中には、予は前者の禪で結構だ、後者の如き大望はとても及ぶ所ではないなどと云ふものもあらう。然し乍ら佛法には元來大小はない。難易高下はないのである。只後者の信を起し、其の希望を以て修行する所に前者の諸種の効果も副産的に自然に成就する筈のものである。

只々正師家の指圖に従つて修行するまでの事である。要するに人々の信念の深淺によつて上中下根の法を説くのであるが、其の實際行ずる點に至つては全く二つなし三つなし。只管に打坐するの一事あるのみである。

## 第四章 中 根 禪

### 第一節 中根上根等を分つ所以

華嚴經に「我今普く一切衆生を見るに如來の智慧徳相を具有すれども、但妄想執着を以て證得せず」と示されてある。又我が高祖承陽大師は「佛祖の往昔は吾等なり、吾等が當來は佛祖ならん」と示されてある。又關山國師は「我が這裡に生死なし」と説破されてゐる。

要するに佛祖の言教は多種多端であるが、實は此邊の消息を縦横に説示し給ふたに外ならないのである。仍つて學人たるものは佛祖の親言親句を聞き人々具足の一大事（佛性）あることを深く信じて、此の智慧徳相を明了にせん爲に禪道に入るべきである。是に於て始めて佛祖道の禪人となる事が出来る。此の間中根上根等を分つ所以は信念に深淺があつて願行に強弱あるが爲である。

## 第二節 中根誘引の手段

其中根の機も大別して二つとなす。その一は信念甚だ輕微にして諸佛諸祖の如き大解脱大悟徹底は吾等の到底及ぶ所でない、吾人は只一分の空理を證して不生不滅の境涯に入ることが出来たらそれで満足だと云ふが如きものを言ふ。佛祖は是等の人々を指して腐根敗種と呵責されてゐる。所が現今も禪人の十中八九は皆この類ひである。

又一つは絶待一道の大解脱道を確信して萬徳の光明を發揮せんことを希望するものである。

以上の如き兩種があるが、要するに信力弱くて法に興味少なく、動々もすると退道心を生ずるのが中根禪の特色である。であるから刻々に一分々たりとも法味を味はしめなければ今生に於ては得力不能として、退轉墮落することを免かれない。

此に於て佛は三百五百の化城を設け、五十二位等の階級を示し、祖師は功勳五位や十牛圖などを以てし、或は機關、法身、言詮、難透等の公案を施設して説示すること宛ら東海道五十三次の風光を眺め、知らず識らずの間に帝郷に直入して龍顔を拜せしめんとすると同じである。要するに是等は皆中根誘引の手段に外ならない。

## 第三節 法は元無法

然るに右の階級等の法は、譬へば月を指すの指、門を叩くの瓦子に等しきもので法は元無法、階級は元無階級であつて、即處即ち是れ帝郷であることを忘れると、指や瓦子を弄することを以て能事と思ひ、或は月や主人公を瓦子なしに示さんとするが如き弊に陥るのである。元來「佛事門中不捨一法不取一法」ではないか。要するに必要に當つては如何なるものも入用であるが、其の時に非ざれば如何なる法も不用である。

此の意味に於て、如來一代時教は親の子を育てるが如く「此處までお出で甘酒飲ま  
そ」の一言であると思ふ。此の意が分明すれば、看話、默照の論などに躓く様な事は  
絶待にあるまい。

#### 第四節 看話默照の長所と短所

看話禪と默照禪の長所と短所とを一瞥して見よう。

看話は第一階級病に陥る。祖師は常に三賢十聖等の知る所に非ずと呵責されて居る  
が、看話はウツカリすると三賢十聖の亞流に落ちる。甚しきに至ると、僅かに氣息を  
通ずると、ドン／＼公案海の兎渡りをして悟り了つたとする。中には更にひどいのが  
あつて、氣息を通ずるところではない只意識分別で解了してドン／＼素通りをやつて  
足れりとして居る。宗乗の講釋をきいて説者も聞者もそれで宗乗は卒業したものと悟  
り濟してゐると何等撰ぶ所はない。

三賢十聖、住持十回、十善十地、十聖の苦

こんな講釋や公案を百千萬遍通つた所で生死の絆にはカスリ傷一つ付くものではな  
50

又默照禪の弊害は、無事禪、默々禪、おさん鍋釜其儘禪に墮して、斷無の邪黨とな  
り、佛祖の命脈を失却し、却つて是れ活禪なりと誤解するやうになる。

併しながら其の長所は、默照の眞禪は佛祖正傳の醍醐味である。純一無雜の正修行  
である。方便や手段を捨てて直に佛祖の堂奥に直入するのは獨り此の禪にあるので、  
凡聖一等の大禪定は此の禪を措いて外にない。たとへ看話の禪と雖も此に至つて成就  
するのである。

又看話の長所を見ると、法眼圓明、智見精到ならしめるのと正念工夫に油斷なかし  
めるのと、學人誘引に便宜なる等、枚擧に遑なしである。

要するに看話禪は王者に即する將軍禪であり、默照禪は將軍禪を離れない王者の禪  
であると思へば其の間の消息は分明するであらう。

## 第五節 結 論

中根の行人たるものは看話も默照もそんな論量は一切要らない。また中機の淺薄を嘆くにも方らぬ。只師家の指導に一任して打坐を勵げれば、それで萬事よろしい。其の間に上根にも進み上々根の頂きにも上り得るのである。又其の一坐上に三學も六度も無量の妙義も完全に備つて居るのであるから、總て他見を止めて深く深く禪定に入れば好いのである。

六度  
六波羅密

## 第五章 上 根 禪

### 第一節 中根と上根との區別

低い境界から高い境界へと一段一段登つて行く、其の間四邊の風光も眺めつゝ、或は楽しみもし、或は休息もする、而して怠惰心の起らぬやうに、無階級中階級を幻設して、次第々に誘引して行くのが中根相應の手段である。

然るに上根の行人は、頭上より脚跟下に至る迄、即ち是れ本來の面目、盡天盡地悉く真如の全體全用なりと信じて、吾が此の一蒲團上直に是れ黄金の地であると信徹し如何なる艱難辛苦に遭遇するも更に違念なく、悉く取つて以て一蒲團となし、中根行者の如く途中の風光などには側目も觸れず、斷乎として斷々乎として這裡金剛坐を坐破せずんば措かずと驀直に進前する機根を名づけて上根禪者と稱するのである。即ち前者の如く次第々に着味しつゝ進むのではなく、總てに脱然として離れて一超直入

に如來地に到らしむることを得る機根である。

尤も初めから上根でなくとも修行力進むにつれて、初根の人は中根に中根の人は上根に進むのである。故に何でも眞面目に正師に參じてドン／＼グン／＼坐りさへすればよいのである。決して自分の機は上中下の何れなりやなどに心配するに當らるのである。

### 第二節 看話黙照一致に歸す

中根誘引の程度では看話黙照一致とは云へない道理があるけれども、もふ茲に至れば看黙一致である。道の芙蓉峯に登るに當つて、看話は公案といふ金剛杖を與へ杖と人と一如になり、その一如も忘れて上るまでのことだが黙照はその杖も捨てて上るのである。眞に一如一體の時は杖も人もあつたものではない、唯慕進あるのみだ。

既に是れ一致なれば、看黙二途は所詮閑家具にしてどちらでもよい。只行人の習慣

性に近い方を用ひると、又師家の流義に依るのみだが、併し正眼の師たるものに流義などのあるのはなさないネ。且つ師家たるものの立場から云ふと、看話の方は比較的活版摺的に導けるから樂だが、黙照の方は斷じて模則はない。時々其の脚底に注意して、紅糸線を斷つべく指導せねばならぬから骨の折れる代りに生々として居る。随つて師にその力がなければ無事の盲目禪に墮落せしめる恐が十分ありと云ふべきである。

### 第三節 看話黙照と悟道の遲速

看話黙照に依つて悟道に遲速があるかどうかと云ふ問題だが、決して無いといふことが出来る。試みに古來よりの傳燈の書を開いて見ても列祖中看話に依つて入道したものと黙照に依つて出身された師は數に於て相違はないのみならず、近くは看話禪を大成された白隱老漢の臘八示衆等にもある、彼の山梨平四郎の様に、何等話頭のない



のみならず、讀書力もなく、一度の入室もないのに、熱烈なる慕道心の激發する所僅かに三晝夜にして徹したといふことである。現に我が道友の二三者に就て見ても全く閑公案なく、或は一は一ヶ月半程、一は二ヶ月間程で徹してゐる。故に公案でなければ悟入出來ないの、遅いものといふやうな妄想を起してはならないのである。

#### 第四節 二つの實例

上根の行人で話頭によつて桶底を脱した近い一例を擧げる。先年の事であつた。東京日本橋の濱町に楠田病院と云ふのがあつた。或る時其の院長楠田謙藏氏に會ふた事があつた。談偶々斯道の事に及んで夜の十一時頃迄話をした結果、氏は彼の南天棒の衣鉢を嗣いだと云ふことがわかつた。

この楠田氏が發心した動機は、例の厭世觀であつて之が容易に解決出來なかつた。

其の結果人間界を辭めて了ひたいと云ふ程思ひつめたのである。然るに氏の同窓の友人で或る醫師が醫學界を去つてから全く消息を斷つて約七八年になるものがあつた。何をしてゐるかと思ふてゐる矢先、突然その人が楠田氏をたづねて來た「君は目下何をやつて居るのか」と聞くと「禪をやつて居る」といふ話「禪とは一體如何なるものか」と楠田氏が反問を試みると「さて如何なるものかと聞かれても一口には中々云へぬ。云へぬがマア死ぬ位の事はなんでもない様になる修養だ」と云はれて「それは面白い、僕もやつて見たいが其の師匠があるか」「ある、目下小石川の白山に道場を開いて居る南隱和尚と云ふ人がある。君も志があるなら和尚を訪ねて見給へ」と聞いた楠田氏は、折柄厭世思想の渦中に居ることとて直に和尚を訪問して見やうと云ふ氣になつて、先づ和尚の心膽を試みると九寸五分の白刃を懷にして、小石川白山の境内に足を運んだ。道場に刺を通ずると、一向風采の揚らぬ老僧が翠丸をアブリながら取次より受取つた名刺を眺めて「久し振ぢやないか」と云ふ。此方では何だか

狐にでもつままれたやうな気がして「イエ初めてお伺ひ申したのです」と云つたまゝ、茫然として老僧の前に進むと「左様か、お前は醫者ぢやと云ふから禰は佐々木かと思ふた……何にしに來たのぢや」斯う云はれて見ると最初老僧の心膽を試みんと懐中して來た九寸五分は何の用にも立たぬ。押して禪の大意を問ふと「禪は別に面倒なものぢやない、お前が醫者なら深切に病人を見て家業を一生懸命に努めさへすればそれが禪ぢやモ一用はない歸れ！」との挨拶、何だか其の日は不得要領で歸つて來た。

其の後再度出懸けて、所謂友人の云ふ「死ぬ事位何でもない」禪の極致を聞こうとしたが矢張老僧は相手になつて呉れぬ。こゝは老僧の鑑機(かんき)の場所であるが、亦實に本分の爲人と申すものだ。だがしかしてゝらで落付いて仕舞ふ人は即ち無事禪、黙々禪に墮つる所である。楠田氏は更に三回目の訪問を試みたが老僧例に依つて例の如き態度である。是に於て楠田氏は大いに立腹して「私は不肖ながら獨立で一の病院を經營し、非常に忙しい間をわざ／＼お訪ねする次第である。道の爲に不惜身命の決心にて

訪問すること再三再四である。然るに少しも相手になつて頂けぬとは誠に残念である。最早再びお目にかゝりますまい」と奮然立ち去らんとした。

其時南隱老漢初めて楠田氏の肩を叩いて破顔一番「御拜せ／＼」と云ふので言はるるまゝに拜し了ると、初めて「趙州無字」の公案を與へてくれた。

此の公案に向つて參究すること滿三ヶ年初めて無字の三昧を悟つた。自分では徹底大悟した積りで南隱老僧を訪ふたが「まだ／＼」と云ふたまゝ、決して許して呉れぬ。其の後一年有半にして初めて桶底を脱する底の快活不徹の域に達することを得たので、便ち老漢を訪ひ胸中今回は許さんも許さんもないと云ふ意氣であつた。果して老漢が見すると直に許して呉れた時に楠田氏は非常に喜んで最初夢の如き生悟りを許さなかつた老漢の徳を謝したとの事である。

又彼の香嚴禪師である。師は中々の佛教學者であつたが學問だけでは腹が張らない、遂に志を發して馮山の靈祐禪師に就て修行し桶底を脱して嗣法したのである。初め

馮山は香巖に對して「父母未生以前に向つて我が爲に一句を道取し來れ」と云ふた。處で香巖何んと言ふても馮山は許さない。香巖竟に翻然として「晝餅飢に滿ず」と遂に幾多の經典祖録を燒き棄てて、爾來行粥飯の僧となり、修行したるが矢張分らぬ。依つて馮山に向ひ「私は身心昏昧にしてとても父母未生以前の一句を道ふことが出來ません。願くは和尚慈悲を以て我が爲に道へ」と。馮山曰く「我汝に向つて道ふことを辭せず、されど漫に説かば恐らく向後汝我を恨むであらう」と云はれて説かなかつた。止むを得ず且らく馮山を下り、曾て大證國師の居られた跡に庵を結び竹を植え竹を友として益々勇猛精進工夫辨道せられたのである。一日庭先の掃除に箒木の先にかつた小石が飛んで竹に當りカチーンと響くや、香巖は豁然として大悟徹底をしたのである。香巖喜び勇んで手の舞足の踏む所を知らず、先づ遙かに靈祐禪師の在す馮山の方に向つて遙拜して曰く「和尚昔日我が爲に説くことあらんには如何にでか今日の歡喜あらんや」と云はれたと云ふことである。

是れ實に學人にも非常の道根があつたと共に、師家も非凡の腕力を要するのであつて、上根の人を接するには實に斯の如くなくてはならぬのである。

#### 第五節 方法を選ばず

彼の洞山は雲巖の説かなかつたことを悦び、臨濟は三年黃檗の所にあつて、臨濟も問はず黃檗も説かず、否説けども悉く聞えなかつた。然るに時到り機熟せば大愚和尚の一言下に大悟大徹してしまつたのである。此の間實に一切を奪ふ默照禪もあるべく公案を興ふ看話禪もあるべしである。

以上は即ち上根の人の修行振りであつて、もう斯うなると、看話でも默照でも活公案でも死公案でも歸する所は同一である。唯々師を信じ、自らを信じ、法を信じて危亡を顧みず、驀然として桶底を脱せずんば止まずとの猪武者的の修行者を云ふのである。

古人頭燃を救ふが如しと云ひ、又翹足に習ふ等の金言や勝跡は皆是れである。其の儘悟りやボンヤリ禪者や、黙々禪者や次第着味禪者の夢にも未だ知らざる所である。然しながら更に一步を進めて上々根の禪には未だ遠しである。

## 第六章 上々根の禪

### 第一節 前後を比較して後者の大旨を明す

上々根の禪とは最上乘の禪、即ち祖師門下の眞實、王三昧を云ふのである。前章迄は其の方便禪であつた。人根の利鈍多類であるから、法も亦多義あつて、前後區別せねばならないので、下根より中根、中根より上根と、次第に漸深の法を幻設して誘導したのであるが、此の三根は皆是れ待悟禪、即ち途中草庵の階級禪である。佛祖の目的禪、即ち盡界超越の大定ではない、手段禪即ち迷悟海中の禪定である。目的禪ではなくして手段禪である。然るに最上乘禪は待悟の手段禪ではない。自家の坐床である。眞如の都の眞唯中である。

要するに前者は有漏地より無漏地に還る道中であるが、後者は是れ漏、無漏一超せる家郷、日用の活三昧である。此邊の消息を佛は「吾有正法眼藏」と宣ひ、達磨は

「凝住壁觀、無他無自、凡聖等一、堅住不移」と道破し、石頭大師は「石頭結草庵、無寶具飯了、從容計睡快」と示し、夾山は「明々無悟法、悟法却迷人、長伸兩脚睡、無喜又無憂」と云つて居る。

悟もなく、迷もなく、亦有もなく、無もない。這裡是れ什麼！速かに道へ、速かに道へ云々の大定である。

永年開山曰く「驀然として盡界を超越し、佛祖の奥裡に太尊貴生なるものは結跏趺坐なり」と宣ひ、太祖大師は「任運堂々として只麼に正坐す」と示してある。若し夫れ教者の言を借らば「一行一切行、一修一切修、凡聖一如、迷悟不二にして因も一乘、果も一乘」と云ふ所であるが、教者は之を自ら語りながら御存知ないのである。即ち泰然自若、堂々として主人公の奥座敷に安坐して居る様子で、百丈禪師も獨坐大雄峰と道破して居る。但しジツとして居ることを云ふのではない。

さて修行者は此處まで到らねばならない。此の境界を自得して始めて、松は吹く説

法度生の聲も明かに聞え、柳は染む觀音微妙の相も確かに見えるので、兀々たる山岳潺々たる流水悉く本來人の面目たることを體得する。此の時に到つてこそ、下女の水汲みも、下男の庭掃きも、主人公の奥座敷にあつて書見するものも、一切の坐作進退總て是れ任運堂々の正坐と云ふものだ。

だが決して素凡夫の炊鍋釜其儘悟者流の夢にだも窺ひ知る所ではない。又任運と云ふても決してのんきな日送りと思ふてはとんでもない間違である。眞裸の坐なり、行なり、住なり、臥なりであるが、久參にあらざれば知らざる底のものである。

風死して雲に去來なく、一陣の暴風起れば黒雲を捲いて飛ぶ。請ふ、去つて白雲に問へ、汝に取捨好惡の識情ありやと。白雲何ぞ這般の妄想を存せんやである。此境界は既に迷悟の情量を超越して自家の奥裡に自受用の王三昧なるものである。故に、前に釋迦なく後へに彌勒なく、又己躬をも絶してをる。永嘉大師の「妄想を除かず眞をも求めず」と云ふのも此邊の消息である。

併し上中下根の機しんもちの眞妄まがたを擔いで居りながら決して眞似まねすべき所ではない。妄想を擔いで居るものは遠慮なく之を除き去らねばならぬ。除き了つて始めて斯く獅子吼する事が出来るのである。此邊の事は如來ですら四十餘年間根熟を待つて始めて示して居るのである。盲目禪者の胡說亂道を丸呑みにしてはならん。

### 第二節 王 三 昧

眞理は法界はつかいに周徧しうへんし、佛法は宇宙うちうに充塞じゆうそくして居る。此の眞法と一如に成り切り、其の成り切つた處をも存せざるに至つて始めて最上乘の禪といふので、法界だの、宇宙だのと云ふても、凡夫の所謂いはゆるボーツとして餘所見よそみすることを云ふのではない。佛祖ぶつその「天上天下唯我獨尊てんじやうてんげゆゑがどくせん」の意である。だがこの獨尊佛どくせんぶつと云ふ言葉に執着してはならん。是に就て思ひ出した。彼の雲門は支那禪門の俊傑であるが、釋尊しやくせんの降誕會かうたんゑに「我れ當時じも若し見えしかば一棒いちぼうに打殺ださつして狗子くしに與あたへて喫きつせしめん、貴たつごぶらくは天下泰平てんかたいへいなら

ん」と言はれた。一休も「釋迦といふ徒らものが世に出でて多くの人を迷まよはしにけり」と尻馬しりうまに乗つて居る。釋尊しやくせんが生れて周行七步しゆうかうしちほして「天上天下唯我獨尊」と獅子吼せられたのは、個々第二人なき天下泰平てんかたいへいの端的たんできであるのであるが、いくら釋迦しやくかでも母の胎内たいないより出づると直ただちに斯る言葉を吐かれたものではない。是れは豁然大悟かつねんだいごの聲だ。吾人も大悟の時は屹度出る聲であるが、併し此聲を遠方にのみ眺めて悟りを待つて居るやうでは上々根の禪者ではない。お互が母の胎内より飛び出してオギャーと泣いたその一聲と、天上天下唯我獨尊といふことと是れ同どうか是れ別べつか。餘所見よそみせずすみやに速すみかに道へ、速すみかに道へ。

彼の雲門大師うんもんだいしは世の所謂亂暴者いはゆるらんぼうものではない。然るに一棒に打殺するとは面白い。此の一棒が見えますか。多年辛酸苦修しんさんくしゆせざれば中々此棒は手に入るものではない。若し此の棒が手に入らねば決して佛祖ぶつそ向上かうじやうの此の禪おちつに落着けるものではない。此の一棒は雲門三十年來、雪峰山下せつぽうに拾ひ得て、佛恩報謝ぶつおんほうしゃの爲ために釋尊しやくせんに捧さげた如法供養によはふくやうであり、兒

孫の爲に些子の一大事を知らしめんとする切々たる深切である。雲門の如き兒孫がなければ佛法も死物になつてしもふ。是の如き法孫があつてこそ、始めて釋尊五十年の説法も光明を放つのである。だが此の禪に到達しなければ、斯う云ふ語は出てくるものではない。下手に口眞似などすると拔舌の苦を受けますぞ。

大智禪師も佛生會に一偈を打して雲門に隨行して居る。隨行するなど甚だ間ぬるい。なぜ雲門の棒を奪つてブチ折つて三段としないのであらう。雲門もさぞ難有迷惑であると思ふ。法螺禪者の様に只大きなことを云ふとのみ思ふてはならん。此に大事があるのである。しかし上々根禪を道破して愈々明白であるから一誦して見よう。

閻浮八萬四千城

不<sub>レ</sub>動<sub>二</sub>千才<sub>一</sub>致<sub>二</sub>太平<sub>一</sub>

活<sub>二</sub>捉<sub>一</sub>嬰<sub>二</sub>曇<sub>一</sub>白<sub>二</sub>拈<sub>一</sub>賊<sub>二</sub>

雲門ノ一棒<sub>レ</sub>虛<sub>二</sub>リ<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>行<sub>セ</sub>

と云ふのである。閻浮八萬四千城は柳綠花紅、山高水長、行住坐臥、迷悟得失、喜怒哀樂などである。是であるから執らねばならん。非であるから捨てねばならんとし

上中下の差別を幻設して日夜戦争の絶間なく、世間も出世間も千才を執つて騒ぎ廻つて居るが、大智の眼より見るときは實に笑止千萬なことである。下山の道は是れ上山の道、衆生を度せんとするに衆生なしで、元より八萬四千城の淨土であるのに事新しく知つた顔して「唯我獨尊」などとは片腹痛い。其の様な寢言を吐くと直に生捕にして雲門に引渡すぞと云ふのである。大智の活捉は大智にして雲門の一棒は雲門にして出来るのだ。さりなら豈誰か是れ雲門大智にあらざるものぞ。佛も豈異人ならんや、てふ大信徹あつて始めて此の禪に直入することを得るのである。若し夫れ信不及ならば且らく去つて階級禪に隨つて來れ。

### 第三節 應用無碍自在

誰れでも世に處して業務のないものはあるまい。上は王侯貴人より下は匹夫野人に至るまで、皆夫々日常の天職を持つて居る。持つて居るのではない。實は職業の裏面

に人間などは隠れて居らん。見よ、鳥となつて飛び、魚となつて躍る。その裏面に何者がある。オイと喚へばオーと答へ、横面を打てば痛い！。其の裏面に何が控へてをる。然るに洋の東西を問はず、妄想學者共は千年二千年以前より善惡の標準や倫道の大本すら未だ分らず、親が子を愛する、子が親に孝行する、そんな義務が何處にある。そんな権利が何處にあるなどと騒ぎ廻つてうろたへて居る始末である。學者には分らなくとも雞の牝と雛にきいて見ても分る筈だ。

ところが自分の業務が如何にも賤しいといふ様な考で、他の職業を羨む者もあり、或は他人の業務が賤しいと云ふて自分を高ぶる者もある。若しこの禪の本面目を自得して正坐（坐る事）だけではないその場々に安住することすれば其の職の何たるを問はず、即處々々自己本來の面目を發揮して行くことが出来る。絶待に尊卑の對立はないのである、がまた決して惡平等では斷じてない。即ち柳に入つては緑に、花に出でては紅、話の時は舌大千に徹してしやべり、寢る時は天地一枚になつて寢る。故に般

若心經には「無罣礙々々々」とあり、觀音經には「即現三十三身」とある。師となつては高く弟となつては下しである。

古の或る禪僧は

白露の己が心を其のまゝに

紅葉にをけば紅の玉

と歌つて居る。面白いネー。永嘉大師は「行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然」と云ふて居るが間ぬるいワイ。然し文章と云ふものは致し方がない。されば行住坐臥の四威儀總て是れ此の禪の一行三昧を打し、斷乎斷々乎として決して前後左右上下深淺などを認めて腰をヒョロツカせてはならん。否ここに至つては決して前後等の法は絶對に無いのである。だが無事禪と思ふては斷じてならぬ。自己本來の面目が通天徹地明了になつて始めてかゝる話が出来るのである。



#### 第四節 誤解を誠しむ

此の最上々乗禪は佛向上の人の所行にして決して上中下根の機の能くする所ではない。○また彼の馱法螺禪者流の知る所ではない。世間凡夫禪と二乗禪との區別さへ見えな  
い。胡亂禪者の窺ひ知る所では斷じてない。且つ上中下根の機は決して未だ眞似しては  
ならぬ。若し強ひて之を眞似んとすれば、醍醐却つて毒藥となり、種々の毒液を流し  
て明師も救ふことの出来ない始末となる。

若し又師としても、自眼がまだ明らかでないのに猫も杓子も只坐れ、坐りさへす  
ればそれで好いなどと亂道暴引する輩よ。一體全體其の坐る(心の意)法が分つて居ま  
すか。實に其の坐る法だけでも一兩年間は入室諮問してヒシ／＼と痒い所に手の届く  
様な鉗鎚を受けねば非思量の端的は分るものではない。然るに只坐れ／＼坐りさへす  
れば人格も高まる身體にも好いと云ふやうなものは全然世間凡夫の禪と一般である。

最上と最下とはよく似てゐる。極端と極端とは眞に紙一重であるから盲者の誤るのも  
無理はないが、實は天地雲壤の差どころではないのである。若し此の向上禪を明らかに  
した師なれば、随つて上中下根の類に應じて自由自在に誘引も出来る筈である。  
爰に佛向上の道人とは、下中上の根純熟して、脚下黄金の地なることに大信徹して  
生々不退の大願一決し、念々不退轉の道機現前して、一切の魔境に對し任運に一超し  
得る底の鐵漢なれば、到未到を問はず、學無學に論なく直ちに是れ這裡向上の那人と  
するのである。凡聖一如とは此の邊の事である。

#### 第五節 向上人の修行振

史を繙くに、永平開山や太祖大師等は云ふに及ばず、祖師方は皆此の機根の人であ  
つた。列祖方は無論どう考へても一世や二世の修行者ではない。

彼の協尊者の如きは一百四十歳の高齡にして終日終夜經を學び坐禪入定せられ一晚

も脇席につかず、三年にして大事を發明されたといふ。永平開山も明全老漢（榮西の法嗣）に八ヶ年間隨身され入室參問の傍大藏經を閲すること二回に及んだ。尙支那に渡つて如淨禪師に入室し二三年、やはり脇席につかれなかつたといふ。

されば斯る道人は、する事なす事が皆佛作佛行の一行三昧で、一足々々通天徹地の王三昧である。眼中生死なく、迷悟なく、世出世なしである。強ひて云へば凡聖等一堅住不移の三昧であらう。

修行此に至つて始めて開山の示さるゝ通り、大悟は家常の茶飯であつて期せずして現前するのである。否一切期待せずして絶對一道の行履に到らねば徹底する時はないのである。永平開山の「永平清規」の中の典座教訓や知事清規などで、大悟發明の因縁が澤山挙げられてあるが、彼の老漢達は皆絶對一道の王三昧中に證果されたものである。永平開山は「莫圖作佛」と示されてある。これは絶對一道無希望の王三昧を言ふのである。「莫圖作佛」に至らねばこの間の眞の消息はわからない。盲禪者の云ふ

やうに、「莫圖作佛」とは、悟はないの、悟は不用だのといふ事では斷じてない。且つ又たとへ上中下根の機と雖も鍛へてく此の「莫圖作佛」に至らなければ眞に絶後の再生復活は出来るものではない。

而して上中下根の人は決して向上人の修行振りなどを眞似してはならぬ。夫々相應の修行を積んで放心懶惰をいましめ横道にそれない様に努めねばならぬのである。

以上は禪の概要を四階級に分けてお話したのであるが、更に一步を進めて階級不無階級の病根を一掃して終りを告げようと思ふ。

## 第七章 結 論

### 第一節 機類千差なれば手段も萬差なり

上來四種の機根きこんに對して四種の禪を略説した。然しながら上々の機にも亦上々上中下の四種あり、乃至下根の機にも亦上々上中下の四種あるので、仔細しさいに點檢てんけんし來れば四四十六種の機根がある事となる。否實に人根は千差萬別であるから、隨つて接衆せつしゅうの手段も千變萬化せざるを得ないのである。しかれども今は畧説りやくせつの都合上只四種の機類を分け、四種の手段を述べて其の綱要かうようを説いたのである。然し又彼は上根此は下根と一應は横に排列はいれつして見るべきであるが、同時に豎たてに一人の上うへに於ても亦極めて下根劣げこんれつ機の時代があつても追々修行し純熟じゆんじゆくするにつれて中根となり、上々根の人となると云ふことも忘れてはならぬのである。

### 第二節 學人の四種と禪の唯一法

機根きこんには上下の四種があるけれども、佛祖の禪ぜんそのものには二種も四種もあるわけのものではない。但し機根に相應さうおうせる手段には千萬無量あるけれども禪は唯一法であるから、學人がくにんたるものは唯妄想分別もうさうぶんべつも我見人情がけんにんじやうもスツバリと捨てて了つて全くの赤子になり、師家しけの指圖さしづに従つて打成一片だてしやういつぺんになりさるのである。それが學人唯一の受用であり心得である。

### 第三節 本書解説の理由

上來長々しくおしやべりをしたが、之も別段必要のない方から云へば全然無用であるが、世には正師ししやうの師承ししやうなき文字禪者もぢぜんしやや、未熟の禪僧たちが其の偏見や、法執ほふしやくに捕へられて、漫りみたに數息觀すそくくわんを謗り、内觀法ないくわんほふを誹り、看話かんわを排し、默照もくしやうを排し、將軍禪しやうげんぜんと貶し、百姓禪しやくしやうぜんと貶し、凡夫ほんぶ禪ぜんは淺劣せんれつ取るに足らずとし、最上々乗は高うして益なしとし、甚だしきに至つてはお炊鍋さんな釜かま其儘そのま即佛法にんでんけうの人天教にんでんけうを以て、直に是れ佛法祖道ぶつほふそだうなりとす

るが如き、荒唐無稽の盲目禪を澤山亂聽して、修行の要津を失ひ、五里夢中に彷徨するものがあるからその蒙を啓かんが爲に贅言を費したのである。

盲坊主の盲禪を聞くと折角修行をしようといふものもその志を失ひ、却つて出放題の禪を稱揚するやうになる。又たとへ修行の志を發したとしても先入の惡智惡覺の爲に妨げられて、西ときけば東に惑ひ、南ときけば北に引かれて、師家の血滴々の教誡も半信半疑で慕直に修行の門に直入する事が出来ない。出来ないので門外に彷徨すること多年に及ぶといふやうなむだ骨を折る。かゝる憐むべき道人を屢々目撃するから、老婆心止み難く一場の閑葛藤を打して、好道の士をして眞直に道に入らしめんとした次第である。故に未だ兎糞的な惡知惡覺屁理窟馱法螺の病にかゝつて居ないものは、更に此の小理窟馱法螺にひつかゝらないやうにするが好い。既に此の病に冒されつゝあるものは此の清涼劑一服を喫して邪岐を捨てて正路に入り正修行に直入するやうに努めねばならぬのである。

#### 第四節 一括して正修行をすゝむ

要するに上中下根と差別をするのは只妄想の深淺に依つて幻設するのみである。妄想の深淺は道縁の濃淡に依るのである。然れば各諸機を誘引する手段に種々あるのみであつて禪そのものに上中下等の差別は斷じてないのである。であるから宗師家たるものは上中下根の機に對してその當機々々の修し易い様に好手段を設けて指導するのである。故に學人たるものは正師家の指圖を眞受に受けて、大々的に憤起して勇猛果敢慕直に進取して他の妄想に奔る勿れといふのである。かくの如く修行すれば古人の言ふ様に大地を打つて打損ずる事ありとも見性は斷じて疑なしである。

#### 第五節 見道は佛祖の面目なり

人或は言はん「佛祖最上の禪は凡聖等一の禪にして迷悟を云々すべきものではない。

随つて見性けんじやうなどといふケチな事を機待きたいすべきものではない」と。然しこれは佛祖の所謂「衆生しゆじやう本來成佛ほんらいじやうぶつ」と云ひ、又は「本際解脫ほんざいげだつ」と道ふ所のもので、禪その物の内容の方面である。此の内容論と未だ承當じやうとうしない吾人の修行の方面談とを混合した妄想である。擇法眼ちやくはふげんのない盲談もうだん禪者は是れを漫りに混合するから何が何やらさつぱり分らなくなつてもふのである。古來如何なる祖師方そしほうと雖も見性悟道けんじやうごだうしなかつたものは唯の一人もない。而して見性の爲には何れも千辛萬苦せんしんまんくの修練しゆれんを積んだのである。

悟道の一着あつて始めて佛經、祖錄ぶつぎやうそろくの意義も分明するのである。若し眼明らかならずして佛經祖錄等を拜するも一種の奇怪きくわいなる哲學書、倫理道德書に過ぎん事とならう。悟道なき佛祖は絶對にない。佛道を欣求するとは即ち悟道を欣求するのだ。

深く之を諦觀諦信たいくわんたいしんすべきである。

▷眼の辨異中同禪參◁

昭和十年五月六日印刷  
昭和十年五月六日發行

定價金貳拾五錢 (送料二錢)

著者 原田祖岳  
東京市丸の内八重洲ビル二〇一號

發行者 加瀬喜一郎  
東京市芝區今入町七番地

印刷者 庭野民一  
東京市芝區今入町七番地

印刷所 大耕社印刷部

發行所 東京市丸の内二ノ六 電話丸の内三二八六番正 同愛會  
八重洲ビル二〇一號 振替東京四一〇一一番信

發賣所 東京市本郷區春木町 振替東京八二一九番 森江書店  
二丁目 電話小石川四一八二番

本會の出版物は營利の目的  
で作るのではなく、正法普及  
修の伴として作るもので  
すから絶対に廉價にして内  
容は充實して居ります、安  
心して御注文下さい。

# 正信同愛會書籍目錄

— 絶好の施本・何れも初心者に向く廉價普及版 —

同愛會叢書	
第一輯 佛法的々の大意(全)	原田祖岳 共著 加瀬喜一郎 定價 二五錢 送料 二錢 四六版 六九頁 現象即實在、緣起即真如、生死即涅槃の解説。佛法の大意。
第二輯 希望に輝ける生活(全)	原田祖岳 著 定價 二五錢 送料 四錢 一四六版 一五六頁 佛法の思想は三寶論に盡く。本書は三寶論を詳説しその妙用を明かにす。
第三輯 坐禪の 話(全)	原田祖岳 著 定價 二五錢 送料 四錢 一四四版 一四四頁 坐禪は畢竟佛法實現の最捷徑、坐禪の目的と實行の心得を示す。
第四輯 白隱 坐禪讚講話(全)	原田祖岳 共著 岩崎巍山 定價 二五錢 送料 四錢 一四六版 一八五頁 白隱老漢の坐禪和讃を解説し現代人の迷妄生活を警しむ。
第五輯 宗教の 太陽(全)	原田祖岳 共著 今成覺禪 定價 五十錢 送料 六錢 三九八版 三九八頁 宗教の歸する所は佛戒にあり、三歸戒、三聚淨戒、十重禁戒を解説。
第六輯 延命 十句 觀音經講話(全)	原田祖岳 著 定價 二五錢 送料 四錢 一四六版 一〇〇頁 十句四十一文字の觀音經を以て佛法の眞髓を解説す。
第七輯 普勸坐禪儀講話(全)	原田祖岳 著 定價 三五錢 送料 四錢 二四六版 二三二頁 曹洞禪の根本原典坐禪儀を平易に解説す、興味亦深し。

特輯	
第八輯 參禪同中異辨の眼(新刊)	原田祖岳 著 定價 二五錢 送料 二錢 四六版 六八頁 四種の禪根を明かし、階梯を追うて參禪の精神を示す
延命十句觀音經靈驗記(全)	白隱禪師 著 原田祖岳 序 定價 二十錢 送料 二錢 四六版 七八頁 埋れた珍本を活版に附し觀音の靈驗。白隱禪師の事實體験體談。
南北相法修身錄(全)	水野南北 著 原田祖岳 序 定價 三十錢 送料 四錢 四六版 一五一頁 人を見んとすれば先づその人の食事を見よ、百發百中、南北先生の秘録。
道華集(全)	原田祖岳 編 定價 五十錢 送料 四錢 四六版 一八二頁 譯陰騭錄を中心として外に珍らしき種蒔和讃等五編を集む。
洞上日課諷經要集(乾坤一帙)	原田祖岳 監修 加瀬喜一郎 編纂 定價 八十錢 送料 十錢 折疊式 二八二頁 僧侶共用、日常必須の經典集。總振假名數本美、携提便、實費提供。
月正信の友(當分休刊)	加瀬喜一郎 編輯 四六版 十頁内 宗教初心の手引、修養、良書の紹介。禪會のニュース。

御注文は  
發行所  
でもかま  
ひません

## 發行所

東京市丸の内二ノ六  
八重洲ビル二〇一號

電話丸ノ内(23)三六番  
振替東京四一〇一一番

## 正信同愛會

## 發賣所

東京市本郷區春木町  
二丁目

電話小石川(85)四二番  
振替東京八二一九番

## 森江書店

終

